



Title	「老いと死の教育」に向けての研究：“真に生きる力”の育成の試み
Author(s)	山本, 恵子
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40103
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	山 本 恵 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 1 2 9 0 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 9 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科教育学専攻
学 位 論 文 名	「老いと死の教育」に向けての研究 － “真に生きる力” の育成の試み－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 柏木 哲夫 (副査) 教 授 白樫三四郎 教 授 三木 善彦

論 文 内 容 の 要 旨

上記論文は、序論において、人間存在の“起点⇄終点”である<生>→<死>及び<死>→<生>という相互の視点から、今日的な教育課題と考えられ“生涯”教育の一環として位置づけられる「老いと死の教育」への問題提起を試みた。

すなわち、《①なぜ“老いと死”を学ぶのか?：“老いと死”をめぐる状況変化》、《②「老いと死の教育」に向けての導入：私たちの生きている「時代の要請」としての生涯教育に位置づけて》、《③誰が誰に向けて行うのか?：生涯発達各発達段階に即した指導を》、《④いったい“何”を教えるのか?：教育内容論に向けて》、《⑤“何”を使って教えるのか?：教材論のために》、《⑥「老いと死の教育」に“何”を求めるのか?：<ねがい>のひとつとしての<死>と自己変容》など、様々な角度から問題提起を試みた。

次に、三部6研究から構成される本論では、序論で取り上げた問題提起を受ける形での基礎的な(調査)研究結果について述べ、その成果を踏まえて、できるだけ具体的にその教育実践に向けての留意点を明確化することを試みた。

すなわち、第一部第1研究では《ホスピス病棟の患者の死に臨む態度について》の調査結果を述べ、<死>から私たちが学ぶべきことについて考察した。同第2研究では《教育におけるQOLについて－<自己評価的意識>と<生きがい度>の視点から》検討した。第二部第3研究では《<自己評価的意識>と<対人主張性>について》、同第4研究では《現代青年の<自己教育性>について》、それぞれの調査結果を述べ、“真に生きる力”の根幹となる<自己教育力の育成>の今日的教育意義、とりわけ<‘健全な’自己評価的意識>を育成することの重要性を指摘した。第三部第5研究の《教育における“問うこと”と“答えること”について》では、「内省を求める問い」を取り上げ、<自己の在り方>や<自己の生き方>を探究することが生涯にわたって必要かつ重要であり、そのような<「人生の問い」を問い続けることの重要性>、また、それが可能になるための前提となる<内面世界・内的自己の拡充深化>、<もう一人の私>を育てること・<自己内対話>の教育的意義などを説いた。同第6研究の《探しものは何ですか?～十牛図を手掛かりにして、被験者N=1の「自己意識」を考える》では、<内面世界を理解することの困難さ>を指摘し、<内面的な促し>による<私にとっての真実>を探究し続けるためにも、<目に見えないものに目を向けるセンス>の育成、その前提となる<本音・実感・納得に基づく‘一人称的’学習>などが必要かつ重要であることを説いた。

以上の内容を検討した結果、本研究では次のように結論づけられた。

1) <生>から<死>への実存を踏まえ、<死>から<生>をとらえる視点で、「老いと死の教育」の在り方を考えていくことが必要かつ重要である。

2) なぜ「老いと死を学ぶ」のか? 「老いと死」をめぐる状況変化に積極的に対処するために、意識的に「老いと死」を学ぶことが必要かつ重要である。

3) 私たちの生きている「時代の要請」としての「老いと死の教育」を“生涯”教育に位置づけて考えることが必要かつ重要である。

4) 生涯発達の各発達段階に即した指導が望まれ、とりわけ学校教育においては<成長保障としての教育課題>と位置づけてとらえ、その教育課題に取り組んでいくことが必要かつ重要である。

5) 「老いと死」の教育内容・素材については、教育実践に向けてできるだけ具体的に吟味・検討することが必要かつ重要である。

6) 「老いと死」の教育目標としては、<自己変容・自己超越・自己実現>などといった一生涯にわたる“人間的成長”を根底に据えて、その教育実践での<ねがい>と<ねらい>をできるだけ具体的に、しかしながら柔軟性を保ちつつ、設定することが必要かつ重要である。

7) <有限的存在>として、例えば<真に個性的で主体的な生き方>をめざすためにも、“真に生きる”ための底力としての<自己教育力>の育成を考える必要がある。その前提となる<‘健全な’自己評価的意識>を育成することや<‘肯定的な’自己概念>の発達・形成を促進することが必要かつ重要な教育課題となる。また、一人ひとりの<内面世界・自己意識の在り方>を重視し、<自己内対話>を可能にするための<もう一人の私>を育てる教育実践(方法)プログラムなどを開発していくことが必要かつ重要である。

論文審査の結果の要旨

国民の80%が病院で死を迎えている日本では、死が日常生活から姿を消してしまった。昔は自然に体験を通して学んでいた死を、現在では意識的に学ぶ必要が出てきている。この論文は将来日本において必ず重要になる「死の教育」の在り方への提言である。

第1調査研究ではホスピスで死亡した患者の「死に方」を家族がどのように見たかをアンケート調査し、「受容の死」と「闘いの死」との差を明らかにした。臨牀的に「良き死」とされる「受容の死」を迎える為には、冷静、沈着、我慢強い性格と宗教心が関係していることがわかった。学校教育や生涯教育の在り方に示唆を与える結果である。

「死の教育」を考える上で、「自己教育性」の観点は非常に重要である。第4調査研究に取り上げられた現代の青年の自己教育性の中に将来「死の教育」をいかに取り入れていくかは今後の重要な課題である。その中でも、本研究で強調されている「死」の視点から「生」を教育することを通して「生と死の自己教育」が実現すれば、教育全体に大きいインパクトを与えることになる。

死を研究する切り口は多様である。医学、心理学、行動学、教育学、社会学、宗教学などがこれに寄与できる分野であろう。本論文は教育心理学を背景に行動学の視点から死の教育の在り方を提言したものである。

本審査委員会は本論文が将来性のある優れた学術研究である事を認め、博士(人間科学)の学位授与に十分であると判定した。